



ブック

同書は「若者よ、おおいに悩むべし!」と訴え、生き方、政治・宗教、進路・就職、学業、友人関係、SNS・ゲーム、親子関係、気分・性格、恋愛、身体などの若者の悩みにQ&A形式で回答する。

大野久氏は、青年心理学の研究者は、アンケート結果の統計的分析だけでなく、授業の中で提出される悩みに関するレポートやリアクションペーパーを読む機会が多いと述べているが、同書は、その強みを發揮して、同時代の若者の空気をよくつかまえたものになっている。

「キャラを演ずる」という傾向については、「キャラは一種のコミュニケーションツール」として受け入れ、①人間関係の単純化、②享乐的なコミュニケーションの促進、③居場所の獲得というメリットを挙げる。そ



日本青年心理学会 企画
大野久、他編
1512円 福村出版
03-5812-9702

君の悩みに答えよう
青年心理学者が考える
10代・20代のためのヒント

の上で、「等身大のあなたを受け入れてくれる友人をつくらう」とアドバイスする。

恋愛や性への失望や物格化の傾向については、「それなら恋愛しなくてもよい」と受け入れつつ、「恋愛は必要だからするものでなく、楽しいからするもの」とし、「愛される喜び」だけでなく「愛する喜び」を大切にしようアドバイスする。

だが、「若者よ、おおいに悩むべし!」という同書のメッセージは、一部の「悩める若者」を除いた一般的な若者にどう受け止められるのだろうか。今日の時代においては、中教審が指摘した「自分探しの旅」についての批判も強い。「現実主義」からしても、教育は、今日の課題に対応したかたちでの若者の自我の確立の支援という役割を放棄することはできない。教育現場で個人に応じた解を積み上げる必要があると評者は考える。

(前聖徳大学教授・西村美東士)